LeLe
☆
lolita
10
ADULT ONLY

目　次

表紙	イラストレーション　流一本	
中扉	イラストレーション　流一本	
目次		2
正しい通販(マンガ)	流一本	3
委員ちょ×委員ちょ改(マンガ)	流一本	17
テスト前を告げる鐘(SS)	白朧	29
タマ・ディバイト(イラスト)	くろうさぎ	36
奥付		

まえがき代りのスタッフの日常つーか、グチ

くろうさぎ　毎度、『LeLe☆ぱっぱ10』のお買い上げありがとうございます。何でこんなに前に居るんだ？

白朧　気にするな。ページの都合だ。しかし、ついに二桁ですが。あれ？ ゼロ・ディバイト本は？

くろうさぎ　そんもん出せるかー!

白朧　知り合いに宣伝したじゃんか、冬コミはゼロディバ本を出すって。

くろうさぎ　君が人の家に、ゼロ・ディバイトの攻略本を置いていくから、ややこしくなったんじゃ!

白朧　NECOの技名が知りたかったから仕方ないな。ちゃんとゲームとセーブデータも資料に持ってきただろ。

俺の熱き拳そしてお前を足蹴にするこの俺(P・P・P・→→K)
この肘でおまえを今夜落としてみせるこの俺(↓+K)

くろうさぎ　君と流も、凰呀(おうが)バトル本を出すとか言ってなかったか？

白朧　字が違うし。

くろうさぎ　なにい! 俺の脳内では合ってるぞ。まったくゲーセンばっか行きおって。

白朧　いやー、ドルアーガが忙しくてな。ウチのギルが4S+まで後23万点。

くろうさぎ　阿呆かい。で、流は？

白朧　ヤツは「死者の宮殿」で力尽きてるよ。スーファミ版だから、データが飛んでな。

流一本　システィーナが…、ドーピングさせまくった、しすてぃーながぁ……

バンプキンヘッドはアタックチームに必須!
剣聖ハボリム+ペトロクラウドは鉄板!

12月某日　秘密基地にて

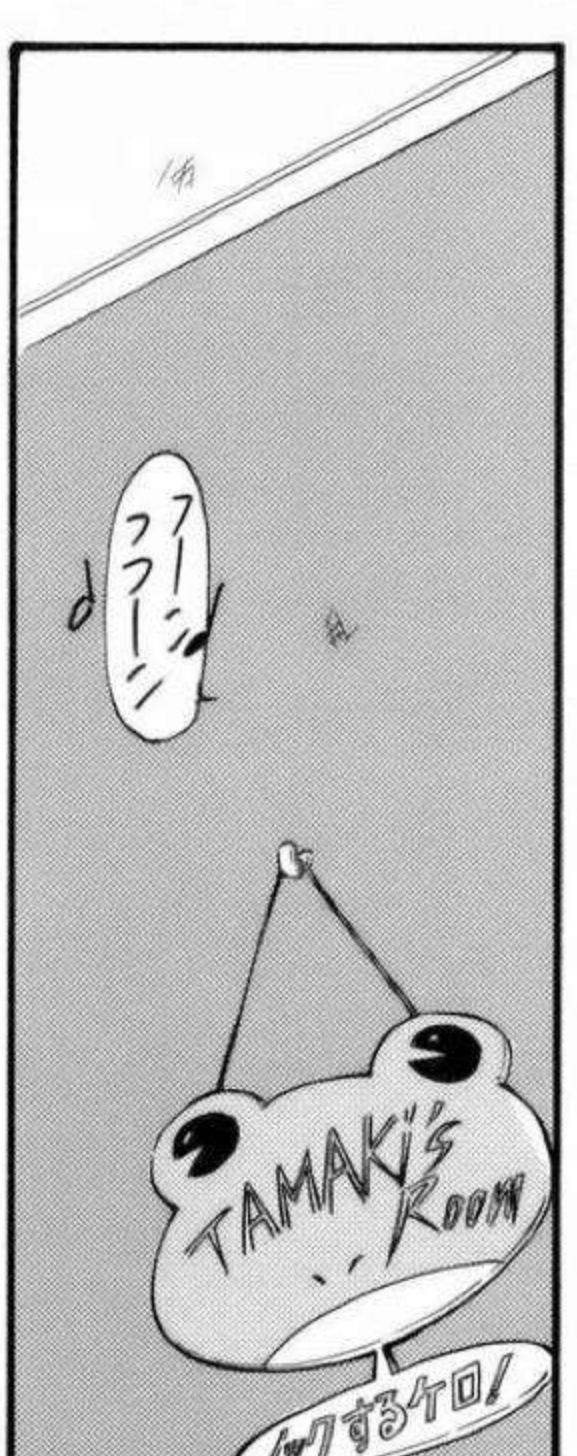
ただいま〜

あら？

雄二ったら通販で何か買ったみたいね…
ふーん

さてさて雄二は何を買ったのかな？
パカ

雄二の物は私の物〜〜♪
フーン
フフーン
私の物は私の物〜〜
ついでにタカ坊も私だけのもの〜♡


フーン
フフーン
TAMAKI'S ROOM
ノックするケロ！

え!?
ギョッ

ブロロロ
あのバカ
何買ってんのよ!!?
じ――
そわ
そわ
本物…
だよね…
ビキ
ビキ
そ～
本とかで見た事あるけど
……
ちら
つにょん
つにょん
あは…
あはは…
面白～い
これくらい
なら
なんとか…
ヴ～ン
はっ
"なんとか"って
何？
無理！
ボトッ
ぜったい
ムリっ!!

……

ちょっとだけなら
いいよね

ドッキ
ドッキ

ゲ

あっ

あ…あ

ヴヴヴ

ビリ
ビリ

何…コレ
指ですると
全然違う!?

ビク

気持ちイイ!!

うそ…
もうこんなに…

こんなの…
収まらない
じゃない

一度だけなら
いいよ…ね

後でちゃんと
洗うから…

始めは
スイッチを
切ったまま…

ん…

はぁあ

あ…あん

あ…あ
ズププ
は…はいる…
だ…大丈夫だよね？
これくらいなら処女膜破れたりしないよ…ね…
三千
三千
っ――!!
あ
ハァ
ハァ
い…痛くない…？
よかった…血も出てない…

本当に…

入ってる…

お汁も
こんなに…

ふぁあっ
ひゃううっ
きゃふぅうん

はっ

はぁぁ

すご…い
いい…いいっ

はぁぁぁ

くっ

ふうぅっ…

あっ

はぁぁん♡

あっ

クリ…好きぃ…
こしゅこしゅしゅるの
しゅきぃ♡

いくぅ♡
いくぅ♡

おしり♡

おしりも
いっしょに…

ああん
もっとぉ♡

もっとおしりの
奥までぐりぐり
したいのぉ♡

これなら…
んん…
あ…
ああっ
はい…るぅ
奥まで…ズブズブおしり入ってくぅ♡
お…
おふ…
えあぁぁ♡

いくぅ
いくいく
♡
いっちゃうぅ♡

雄ニーーッ!!

あんた〜

何つーもん買ってんのよ!!

ご…誤解だよ〜

それは同じクラスの友人達が冗談で送りつけてきたんだってば〜

姉きいるのしっててて…

ビク

ビク

剛れた〜

ってゆーか何で姉貴が勝手に開けてんだよ

まさか自分で使ったんじゃ…

バ…バカ言わないでよ!

ドキんちょ

と…とにかくこれは私が没収します

私が書庫(ここ)に拘る理由は
もう一つある…

この一冊の本

すっ…

ジッ

それは…
単なる官能小説と
言えばその通りだった
のだけど…

ハァァ

じゅん

男性を知らない
私には十分すぎる
程刺激的で…

私の中の
もう一人の私が
呼び覚まされる…

そんな私の目の前
には…

あ…

ビクッ

ビクッ

ん…

プチョ

あん

ん…

あっ

ちゅう♡

ちゅう♡

ん…

ん…

これで…
いいんですか？

ぐぃぃ…
あ…
ぷしゅっ
ぐぃぃぃぃぃ
お…
おお…
あっ
ああ
ぐぃぃ

はあ
はあ
フッ
はあああ
ああ～～
ん♡
かぷぅ♥
ん
プチ
プチ
プチ
あんん
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ
ズボ

あああっ

ビギッ

ふぁああ!?

ズギュッ

!?

ムニュ

ムニュ

ズボッ

あ…や
そこは…

ぶるるるる
ぶるぶる
くふふふふ♡
ぼぼぼぼ
きゅ～♥
ぱく
ぱく
ア
ア

んっ
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
はぁぁ
んんっ
んん♡
お…おち●ちん♡
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
はっ…
ああん♡
ああっ♡
はぁ♡
あ♡

ん
ん
ちゅ
ちゅ
んん♡
ッ
ッ
あっ♡
ちんぽ♡だってよぅ
プルン
ぷるん
ぷるん
んふ♡
フッ
フッ
ひぅん♡
ズギュ
ズギュ
ズギュ

ああああ♡

気持ちいいいっ♡

ブルブル

プルン

ブルル

私は…

他のどんな
淫猥な本を読んでも
こんなにおま●こが
濡れる事はありません

あ〜〜っ♡♡

でてるっ
おしりの
射精してるっ♥

そしてこの本を
書庫(ここ)以外の所で
読んでもこんなに
おしりの穴が腸液で
ヌルヌルになる事も
ありません

ビク

ビク

ブポ

ブポ

ビュルル

おまんこも♥
おまんこも
射精されてるっ♥

あ〜〜♡

いく♡

いくっ♡

はぁ〜

はぁ〜

もっと…

ピュッ

ピュッ

ピュッ

もっとぉ♡

ち●ぽぉ♡

ち●ぽ挿れてぇ♡

ごごにだけ存在する
もう一人の私

この書庫と本に囚われた
淫乱なメスです

ブル

ブル

私は…

ハァ
ハァ
トロー
誰か…
小牧さんいる？
手伝いに来たよ
はい♡
ちゅる
つぅ
つぅ
私をここから解放して下さい…

テスト前を告げる鐘

著者　白鵬

明日から期末テストという日の帰り道にソレは起こった。いつも通り校門前で、四人で帰ろうとしている時だった。
「タカ坊。明日からの試験は大丈夫なの？」
その、環の一言が引金だった。
「ふっふっふ、姉貴。愚問だぜ、俺と貴明にそんな自信なんてないぜ！」
無駄に自信満タンに雄二が答える。このみは、マイペースで歩いているだけだ。
「アンタには聞いてない！」
無論、その答えは環に一蹴された。
「自信はないけど、まぁ、一夜漬けかなぁ……」
実際、今までそんなもんだった。その貴明の返答は環のお気に召さなかったようだ。片手でこめかみを押さえ、あきれ返っていた。
「もう、そんなことじゃ、ちゃんとした知識は身に付かないのよ。まったく」
あきれた声で呟かれる。
「やーい、タカくん怒られたぁ～」
今まで前をに歩いていた、このみまでバカにしてきた。
「そういうこのみはどうなんだよ？」
「このみは、ちゃるとよっちと勉強会なのでありますよ」
歩きを止め、直立不動の姿勢でこのみが答えてくる。
「あの二人とは、学校が違うだろ？」
「でも、昨日電話したら、テスト範囲が重なってるから、一緒に試験勉強しようって」
「よしよし、このみはちゃんとしてるのね」
「へへ～」
タマ姉がこのみの頭を撫でる。撫でられているこのみは、子犬のように目を細めて、喜んでいる。
「さて、この馬鹿タレ二人をどうしようか？」
撫でている手を休めて、こちらの二人を値踏みするように眺めて考え始めた。
「決定！　今日帰ってから、ウチで勉強ね」
「え～、姉貴横暴！」
雄二がすぐに不満を出した。
「文句言わないの！　じゃあ、一旦帰って、二時に集合。わかった、タカ坊？」
当然のごとく、雄二の文句は一蹴される。
「了解～」
こうして、向坂家での勉強会が強制発動されたのだった。

「……後に覇王と呼ばれたドルガルアである。多民族からなるこの地を統一したドルガリア王は他民族間の婚姻を奨励し、国教を一つとすることで……」
軽い頭痛を感じながらも、世界史のテキストを小声で読む。
貴明と雄二が、世界史の詰め込み四苦八苦している横で、環はゆったりと数学の参考書を解いている。
「だめよ、タカ坊。そん覚え方だと、いざというときに役に立たないわよ。ちゃんと時系列ごとに関連つけていかないと……」
環が数学の問題を解きながら、貴明の勉強に口を挟んでくる。
「……『古の昔、力こそ全てであり、鋼の教えと闇を司る魔が支配するゼテギネアと呼ばれる時代があった』ってあるでしょ？　ここはね……」
ボォーン、ボォーン、ボォーン
三時、向坂家の柱時計が鳴り響く。
「おっと、三時だ。姉貴、お茶にしようぜ」
休憩という口実が嬉しいのか、雄二はすぐに立ち上がり出て行こうとする。
「まだ、一時間しかやってないじゃない？」
雄二は、戸口の所で首だけこちらに向けて、言い返してくる。
「姉貴、この前、勉強の詰め込みすぎはよくないって言ってただろ。適度に休憩を挟んだほうが、結果的に能率も上がるって…」
「まったく、こういうことにだけは頭が回るんだから。いいわ、お茶にしましょう」
環も立ち上がって、準備しようと厨房に向かおうとするが、それを雄二がさえぎった。
「おっと、姉貴、ここは俺に任せてくれ！」
いつもは頼んでも面倒臭がる雄二が、率先して行動するなど珍しいことだった。
「どうしたの雄二？」
「いつも姉貴ばかりで悪いだろ、たまにはね」

「ふ〜ん、珍しいこともあるものね。じゃ、頼むわね」
姉弟の押し問答は数秒で決着がついた。大体、雄二は最後の環の返答など聞きもせずに厨房に走っていった。
「雄二が、珍しいな……」
貴明も同じ感想を漏らした。

だが、雄二は向坂家厨房にて陰謀を企んでいた。
「くくくっ、甘いな、姉貴」
服の内ポケットから、蒼いビンを取り出した。
「この通販で買っておいた。ポーションオブスリープをお茶に混ぜて、姉貴は安らかに眠ってくれ。そして、俺と貴明は自由の翼（フリーダム）手に入れるのさ」
人数分のカップを用意して、紅茶を煎れる。『数滴で、快適な睡眠を提供します。象だってイチコロ』とかかれているビンから、三つのうち一つに数滴垂らす。
「これでオッケー。……、いや…待てよ、あの姉貴の事だ。この程度じゃ時間が掛かるかもしれん」
と、さらに数滴垂らす。
「念には念を入れて……だ」

数分後、雄二がトレイにカップを三つ乗せてやって来る。
「さっ、姉貴に貴明、茶が入ったぜ」
カップを各人の前に配る。
「じゃ、頂くわね」
環はカップを持ち、口に運ぼうとする。それをジッと凝視している人物がいた。
「どうしたの？　じろじろ人の事見て……」
「あ、いや……、何でもないんだ……」
環に見られると露骨に視線が泳いでいた。気を取り直して再度、カップを口に運ぼうとすると、雄二がまたも凝視していた。環がカップを持つ手を止める。
「あ……」
環は雄二とカップに視線を巡らす。
「ふ〜ん……。雄二？　何かした？」
環の視線から露骨に視線を外す雄二、自供したも同然だろう。
「いや…、何もしてないぜ……」
「雄二。ちょっと飲んで見なさい」
「え？　いやいや、それは姉貴のだし、ほら……、俺の分はここにあるから……」

「い・い・か・ら・の・ん・で・み・な・さ・い！」
環は左手で雄二のこめかみにアイアンクローを極めると、強引に顔を上向かせ、カップを口に近づけて、そのまま紅茶を流し込んでいく。
「あぢ……、あつっ、舌が……、ぶはぁ……、げほっ」
どうやら、最後には器官に入ったらしい。
「お、おい雄二。大丈夫か？　タマ姉、やりすぎじゃない？」
「いいのよ、これで雄二が何を企んでいたかはっきりするから」
アイアンクローから解放された雄二が床に横たわる。その横に貴明が寄り添っている。
「う……、貴明、俺は、もう……ダメだ……、すまねぇ、自由を我が手に……」
雄二は右手を天を掴むかのように掲げるとそのまま力無く腕がたれさがる。
「ゆーじー！」
分かってやってるとしか思えないノリで、貴明は雄二の体に縋りつく。
「ただ、寝てるだけでしょ」
その道化のような芝居を見て、環は呆れるように言い放つ。
スースースー
倒れている雄二からは、規則正しい寝息が聞こえる。
「タカ坊、悪いんだけどこのバカ弟を部屋のベッドに転がしておいてくれない？」
「……わかった」
貴明はしぶしぶ承諾した。雄二の足を引っ張って部屋まで運ぶ。

雄二を部屋のベッドに寝かせて、毛布をかけてやってから居間まで戻ってくる。
「寝かせてきたよ」
「ご苦労様、タカ坊。少し休憩しましょう」
貴明が床にあぐらをかくと、環はその膝に頭を乗せてきた。
「わっ、タマ姉……、何を……」
「いいじゃない、休憩よ。休憩。それとも、イヤ？」
「イヤ……じゃないけど……」
「じゃあ、問題なし！」
貴明は居住まいを正して、環の頭が落ち着きやすいようにしてみる。
「ふっ〜、落ち着くわね……」
環は目を閉じ、気持ちよさそうにしている。日向ぼっこしている猫のようだった。
しかし、貴明の方はそういうわけにもいかない、現在の状況を考えると、ど

うしても情欲が湧きあがってくる。ソレは容易では抑えられない程、急速で爆発的だった。
抑えきれない情欲を環にぶつけるため、貴明は、腰を曲げると環の唇に自分の唇を重ねる。
「ん……、んん！　ん……」
環は驚きに目を見張るも、貴明の表情を見て、ゆっくり貴明の舌を口内へと導いていく。
「ん……はぁあ……ん」
ゆっくり、唇を離すと、二人の唇に銀色の橋が掛かって落ちていく。環は上半身を起こし、貴明の前に正対する。環がゆっくりと上着のボタンを一つずつ外していく。淡い青のブラジャー包まれた巨大な二つの丘が徐々に現れる。
「タマ姉……」
戸惑う貴明をじっと見つめ、恥じらいの表情を浮かべながらも、環は上着を脱いだ。
むっちりとした柔肉が少々窮屈そうにブラジャーのに締め付けられている。貴明の視線は、圧倒的なボリュームの乳房に釘付けになっていた。貴明は思わず、ごくりと唾を飲み込んだ。
「ふふっ……、タカ坊……」
環の視線を股間に感じて貴明は慌てる。すでにそこは雄々しくみなぎっており、見事なテントを張っている。
「もう、そんなになってるんだ……」
環が、体を近づけそっと耳元に囁いた。耳に環の熱い吐息がかかり、貴明はぞくりとする。同時に、よりいっそう股間の硬度も増した。
(その場に押し倒したい……。タマ姉を無茶苦茶にしたい……)
そんな強烈な思いが、貴明の下半身からこみあげてくる。
レースで飾られた淡い色合いのブラジャーの縁から、環のむっちりとした胸が今にもはちきれんばかりだ。ブラジャーのなだらかな曲線が、よりいっそう彼女の胸を強調して、強烈な色香を放っていた。
貴明は、環のそんな姿を目の前にして、荒げる息をこらえることができない。貴明の視線を気にしながら、今度はジーンズのファスナーを下げて脱ごうと前かがみになった。
今、環の上半身を覆っているものは、ブラジャーのみで、じかに素肌に熱い貴明の視線を感じている。
貴明の息が荒くなっていることに、環は気付いていた。
しかし、彼女の息もかすかに弾んでいた。下腹部が熱くなり、柔らかな襞で覆われた部分が勝手にひくついてしまう。

環が前かがみになったとたん、環の豊満な胸が重力に従って揺れる。その様子が、貴明の心臓を貫いた。
環がジーンズを脱ごうと動くたびに、ボリュームのある乳房がさらに揺れる。そして、ジーンズからブラジャーとお揃いのショーツが見え隠れする。それはまるで、貴明を誘ってるかのように見える。貴明の理性が弾け飛ぶのを感じた。もう我慢の限界だった。
環がジーンズを脱ぎ終わった瞬間、貴明は環に覆い被さっていた。
「きゃ、タカ坊！」
環の背中はテーブルの上に押し付けられた。乳房に押し付けられた、貴明の胸板から、服越しに貴明の鼓動が伝わってくる。その鼓動の速さを感じると、自分の体も火照ってくる。
荒い呼吸のたびに、貴明の首筋から男の匂いを感じる。貴明の匂いが体の中に巡っていくと、頭はぼうっとし、体の奥から蜜がにじみ出るのを感じた。
「タマ姉、もう……、我慢できない……」
言い放った貴明は、環の豊かな胸に顔をうずめた。
貴明の視線を受けて少し緊張気味だったのか、その柔肌は汗でしっとりと湿っていた。だが、決して環の胸を損なうものではなく、甘美な調味料のようだった。
貴明の体が、環の体とぴったりと押し付けられ、ズボンの下のふくらみが環の太腿に触れる。その硬さを感じて、環はよりいっそう頭に血が昇っていく。
「タマ姉、誘惑しすぎだよ。もう、止まらないからね」
「タカ坊ぉ……」
貴明は環を強く抱きしめると、彼女の頭をかき抱くようにして唇を合わせた。柔らかなお互いの唇を感じながら、二人は情熱的に唇を絡めていく。唾液が絡み合い、舌は生き物のように口内をまさぐる。
「んっ……ふぅ……んっ！」
吐息交じりの喘ぎ声が環の唇から漏れ出る。
貴明は、下唇を甘噛みしながら、手を胸に這わせる。貴明は胸の先端部分に当たる箇所に指の先端が触るように手を動かし始めた。
「ん……、んぅ……、はぁ……んっ」
うっすらと目を開くと、環は身をよじる。
胸の表面をくすぐられるかすかな快感が、焦らすような感覚を彼女に与える。ブラジャー越しに、丹念に胸を撫で回されるだけで、彼女の秘芯は生き物の様にひくつく。
不意に貴明が手に力を込めた。
環の両脇から胸を中央に寄せるような格好になる。

ただでさえ深い胸の谷間がいっそう強調された。
そのまま、貴明は勢い任せて、環の胸を揉みしだき始めた。
既に乳首は硬くしこり立ち、鎖骨のすぐ下、ブラジャーに覆われてない部分の盛り上がった柔肉はむにむにと複雑な動きを見せている。
下着の上から、貴明の指が自分の胸にめり込んでいる様子を目にすると、体の奥から新たな蜜がにじみ出てしまうのを感じる。
「ん、あぁ……はぁ……胸、あんっ、そんなに乱暴にしちゃ……ああぁ！」
激しく胸を揉まれながら、環ははぁはぁと喘ぐ、そんな彼女の首筋にキスマークをつけて行く貴明。
「でも、タマ姉、気持ちよさそうだよ……」
環の耳元で囁きながら、柔らかな耳たぶに歯を立てた。その間も貴明の手は執拗に胸を嬲る。
「んっ！　それは、……ああぁん、胸、弱い……のぉ」
首をすくませて、体をびくびく反応させながら、環は甘えた声を出す。
彼女のブラジャーを押し上げると、むっちりとした柔らかな丘が下から押し上げられ、薄紅色の勃起した乳首があらわになる。
環の細い両肩から紐を外す。とたんに環の真っ白な胸があらわになる。
覆うものが何もなくなったのに、重力に逆らってつんと上向いているお椀型の双丘がふるふると揺れている。その先端には大きめの薄桃色の乳首がたたずんでいる。その蕾に誘われるように顔を近づけていく。
貴明が、量感たっぷりの双丘を両手で寄せながら、しこりたった蕾を口に含んでいく。
「んぅっ……」
環が切なげな表情で、小さな声を上げた。
貴明はそのまま、口に含んだ乳首に舌を這わせると、思いっきり吸いたてていく。
「ん、あぁぁ……」
環の声が艶を帯び、熱い吐息を吐き出していく。体をよがらせながら、目を閉じ、貴明の愛撫に身を委ねる。目を閉じたことにより、胸に這う貴明の舌の動きをいっそう強く感じる。
貴明は、片方の乳首を吸いながら、片手でもう一方の乳首を摘んでみる。
「あんっ！」
環の躰がびくりと反応する。
貴明は、人差し指と親指で、環の頂をこねくり回しながら、残った指を柔肉に食い込ませる。そのまま力を入れたり抜いたりするたびに、環の胸は、まるで粘土のように形を変えていく。

「んっ、っはぁ……あ、あん、……そこ、だ、だめぇ……」
胸ばかりを執拗に嬲る貴明に、環が喘ぎながら言った。
とろんとした表情で、頬はほんのりと朱色に染まっている。
「タマ姉……、胸をこうされるの好きでしょ、すごい気持ちよさそうだし……」
そういって、貴明は乳首に歯を立てる。
「っつ！　あ、あぁ……い、いたいぃ……」
突然の刺激に目を開く、痛いとは言いつつも、その声は甘さを帯びているのが判る。貴明は続けて甘噛みをする。
「や、やぁあ、や、あぁぁん。そこ、そ、そこ、だめぇ……、あぁぁん！」
環が躰を反り返らせ、ぎゅっと眉をひそめる。額にはうっすらと汗がにじんでいる。
環の反応で興奮した貴明は、なおも執拗に胸を責める。乳房を鷲掴みし、片方には乳首に歯を立てて、もう片方の乳首は指で捻り上げる。
激しくなった責めに、環はよりいっそう高い声を上げる。
「あ、あぁぁぁ、も、もう……、だ、ぁめぇ！　はぁん、やぁぁぁんっ！」
全身を硬直させると、気だるそうな表情で、テーブルに体を預けた。
はぁはぁと愛らしい息遣いで、胸を上下させている。
「タマ姉、イッちゃった？」
躰が弛緩しきっている環の顔を覗きこんで、貴明が問い掛ける。
「う……ん、イッちゃった。タカ坊に胸弄られただけで……イッちゃった……」
ぼうっとした声で答える。弛緩した躰を身じろぎさせ、横向ける。
ゆっくりを貴明が、形のよいヒップに手を這わす。ショーツ越しでも張りのある弾力が感じられる。
「んっ……」
環がヒップへの愛撫に応えるように、もじもじと腰を動かす。
貴明は、ショーツの感触を感じながら、環の尻肉を撫でまわしていく。
少しづつ、力を込めて臀部の肉を揉みしだいてしく。そして、その指は秘所まで到達する。
今までの感触とは代わり、たっぷりと湿り気を帯びていた。
「こんなに濡れて……」
「ぁぁあっ！　……タカ坊のせいだからね……」
貴明は、そのぬめりをショーツに広げはじめる。
ざっと広げると、その濡れそぼった指を引き抜き、環の前に差し出す。
「タマ姉……」
意図してることが伝わってのか、環は、ゆっくり自分の愛液に濡れた貴明の指を舐め始める。

貴明は、指先に環の滑らかな舌の感触を感じていた。ゆっくりと指を動かしていく。
「んぅっ……」
くぐもった声を上げながらも、環は貴明の指を愛しそうに舐め続けている。
貴明が、指の出し入れし始め、艶かしい赤の唇から、自分の指が出たり入ったりを繰りかえす様は、男女の営みの様で、淫靡極まりなかった。
環の唾液にまみれた指が、彼女の口内を縦横無尽に動き回る。
そのたびに、環は艶めいた声をあげる。
じきに、彼女の口の端から、唾液が一しずく零れ落ちた。
「すごい、エッチな顔……」
目元を上気させて、自分の指をしゃぶる環のしどけない顔を見つめながら、貴明は空いてる方の手でショーツを少しづつ脱がしていく。
やがて、丸まったショーツが環の足元へ落ちた。
ようやく、指を抜き、そのまま強引に脚を広げさせる。
「ああっ！」
環は反射的に脚を閉じようと動くが、貴明はソレをさえぎるように、体を割り込ませる。
しっかりと押さえつけられ、開かれた秘所を貴明は見つめる。
うっすらとした茂みと、その下に愛液に濡れた花弁が見える。視線に反応するように、時折ひくついている。
「綺麗だよ、タマ姉……」
「そんなに、じっと見られると恥ずかしいじゃない……」
「そうなの……？」
(初めての時はあんなに強引だったのに……)
「あ、あの時は、風邪でボーっとしてたし、その…、色々あったのよ！」
貴明の表情から読み取ったのか、顔を赤らめて言い訳してくる。
貴明は、茂みに顔を近づけていく。甘酸っぱい芳香が漂い、すぐにでもむしゃぶりつきたくなる。紅色の襞が折り重なって、たっぷりとした愛液で光っていた。
「タカ坊……、も、もう……」
「もう……、何？」
少し意地悪く貴明が聞き返す。
「タカ坊の……、ほ、欲しいの……」
環は自分で花びらを広げると、貴明の熱い肉棒に手を添えて、懇願する。
「なにが欲しいの。タマ姉はっきり言って……」
何かが吹っ切れたように、環が声を上げる。
「タ、タカ坊の……、タカ坊のオチ●チンがほしいのぉ……！」
ついには、環は目を瞑り懇願する。
「ダメ。まだタマ姉のココ、味わってないから……」
「え……？」
貴明はしゃがみこむと、環の濡れそぼった叢にそっと顔を近づけた。
甘酸っぱい女の香りが貴明の鼻腔に染み入る。
貴明の指先が、環の花びらをそっと左右に開いた。
露にまみれた赤い肉襞が姿を現した。
蜜が環の股間からつっと漏れ出ると、銀糸となって床へ落ちていった。
「やぁ……タカ坊……、そ、そんなぁ……ん、んん……はぁあ」
彼は、複雑に折り重なった襞を掻き分け、やがてぷっくりと充血したクリトリスを発見した。
かろうじて覆ってる薄皮すらめくり上げ、完全にクリトリスを露出させ、口付けた。一番敏感な箇所を舐められ、環の全身がいっそう火照った。
「んんぅうぅっ！　そ、そんなとこ、や、ああぁ……も、もう、やめて……」
貴明の頭を必死で押さえ、その動きを止めようとする。
しかし、貴明の動きは止まらない。
むしろ、環が抵抗すればするほど、さらに舌を激しく動かし、クリトリスを熱心に吸いたてる。
びちゅびちゅという湿った水音がする。
「んっ、ふ、ふう……んん、あぁ……んっ」
ぽたぽたと愛液と貴明の唾液が交じり合った液体が床の染みを広げていく。
「こ、こんなのぉ……、……っふぅうぅぅん！」
環がひときわ大きく躰をしならせ、両脚に力が入り、貴明の頭をぎゅっと強く抱きしめた。
その結果、貴明の顔が、環の股間に押し付けられる形となる。
新たに噴出した蜜が、貴明の顔を濡らした。
「はぁあ、はぁあ、……んぅん」
貴明は、顔に浴びた蜜を舌で舐めながら、今度は、環の太腿を大きく持ち上げた。
「タカ坊ぉ……？」
環は愉悦に蕩けた表情で貴明を見上げた。
貴明は、そんな彼女にキスすると、その脚を高く抱え込み、柔らかな花弁に、みなぎった半身をあてがった。
「いくよ……」
「ああ……、タカ坊ぉ……」

愛しげに目を潤ませながら、ゆっくりと頷いた。
ゆっくり、下腹部に圧力が掛かる。環が反応するたびに、肉棒がぎゅっと締め付けられる。
じわじわと挿入する肉棒に圧力が掛かる。
貴明は、さらに下半身に力を込め、環の奥深く目指して進んでゆく。
少しずつ竿が環の躰の中へと収まっていく。
「んっ、ん、ん、んぅ……んーー！」
じきにみなぎった男の半身が全て環の中に収まった。
「んっ、はぁあ、はぁん！　タカ坊ぉ……」
最奥まで到達して、環は軽い絶頂を迎える。
そのまま、貴明は環の両足を抱え込むと、ゆっくり動きはじめた。
「んんっ！」
環の中で膣から脳に突き抜けるような甘い痺れが駆け昇っていく。
貴明は、完全に抜けるぎりぎりまで腰を引いてから、再度、最奥に向かって腰を叩きつけた。
「あぁあっ、はぁああんっ！」
途端に、環が力いっぱい貴明に抱きつくと、その背中に爪を立てた。
そのまま、ぱんぱんと小気味よい音と同時に、男女の性器がこすれあう水音が室内に響き渡る。
「ん、あぁああ、あ、ああん、んあぁああ！」
環は頭を左右に激しく振りたてながら、大きく喘ぐ。
最初は、必死で声をこらえようとしたのに、貴明の抽送が激しくなるにつれ、いっそう声は甘さを帯び、大きくなっていく。
環のよがりようを見て、貴明の興奮はいっそう高まる。
「ん、は、はぁあ……、タカ坊……ぉ」
貴明のピストン運動が、ずしんずしんと子宮に響き渡る。
「タマ姉ぇ……」
貴明が耳元でやさしく囁いた。熱い息が耳や首筋に吹きかかり、環はびくりと反応してしまう。
躰はいつもより貪欲に快感を貪ろうとしていた。
環は、軽い絶頂を何回も向かえ、そのたびに意識が飛びそうになっていた。
そのたびに、彼女は自分の豊満な胸を力いっぱい掴み、その痛みでなんとか意識を保とうとしていた。
環の長い指がたっぷりとした柔肉に食い込み、形を変える巨乳がいやらしい。
「も、もお……。はぁ、っんぅ。だめぇ……、は、激し、すぎぃ……ああ！」
限界だった。

環は、とろんとした目で貴明を見つめると、躰を思いっきり仰け反らせる。
大きく張り出した質感たっぷりの胸が、天井に向かって突き出される。
途端に、子宮が貴明を渾身の力で締め上げた。
「は、はぁぁ！　も、もう……出るよっ！」
「ん、んぅうううぅ、ああぁん、き、来て！　来てぇぇぇ！」
自分に向かって突き出された環の大きな乳房を強く握り締めながら、貴明は力いっぱい環の奥に半身をたたきつけた。
貴明が怒張が、環の膣内で爆発した。熱くて濃い精液が、環の子宮に勢いよく放たれる。
「あ、あぁぁあぁぁぁ……、タカ坊のが、なかに、いっぱい……、んあぁ……」
四肢を激しく震わせた環はきつく目を閉じたまま、ひときわ高い声を上げた。
貴明は力を抜いて、環の躰に体を重ねる。
ちょうど、彼女の胸の谷間に顔を埋める格好となる。
二人はつながったままで、お互いを感じながら、荒い呼吸を整える。
「んっ……ん、……タカ坊ぉ……」
快感の名残で、時折、環の下腹部がびくびくと痙攣する。
甘えた声を出す環を見て、貴明はやさしく彼女の頭を撫でた。
すると、環はうっすら目を開け、気持ちよさそうに微笑んだ。
そして、貴明の頭を思いっきり抱きしめる。
むっちりとしたすべすべの柔らかな胸に両側から挟まれ、貴明は安堵の表情を浮かべる。

十分ほどそのまま休んでいた。
「はぁ、あっ……ん、幸せ……」
ようやく落ち着いてきた環が、熱いため息をつきながら呟いた。
「胸の奥が熱くって、切なくて……もう、どうしようもない感じ……」
環の絶頂を向かえて昂揚した顔を見ていると、貴明の下半身がむくりと反応した。
環が言葉を紡ぎ出すだびに、ひくひくと膣内が収縮を繰りかえす。
その動きに誘引されるように、再び肉竿は硬くそそり立ち始めた。
環は脚に力をいれると、腰を浮かせて貴明を引き抜いた。
途端に今まで肉棒で蓋をされていた膣内に満ちていた愛液と貴明が放った精液があふれ出て、貴明の叢をしとどに濡らした。
動こうとしていた矢先に、環に気勢を制される。
環は、うつ伏せになると、腰を高く上げてきた。
小さなセピア色のすぼまりのすぐ下に、ほころんだ濃い紅色の花弁が見える。

そこはすっかりほぐされていたし、充分に濡れそぼってもいた。
そのせいで、ほころんだ箇所から内側のピンク色の粘膜までも確認できる。
貴明の胸を灼熱の棒が貫いた。
環は首だけ貴明の方に向けると、少し顔を赤めて呟いた。
「タカ坊ぉ……、きて……」
貴明は黙って頷くとすでに限界まで膨らんだ半身の頭を花びらの入口に添えた。
その熱さを粘膜に感じて環は悩ましげに腰を動かした。その途端、つつっと一筋の蜜が二人の触れ合った部分からこぼれ落ちると、床に零れ水溜りを作る。
貴明は、しっかり環の腰を抱え込むと腰を奥へと進めた。
「っんんっん！　はぁぁあん」
照明を反射して鈍く光る刀身が、環の中へ再び侵入を始める。
後ろから貫かれるのは、前とはまた違った感覚を彼女にもたらす。
実際よりもひとまわりも太い灼熱の棒が、より深く挿入されるように感じる。
「あぁぁ……タカ坊が奥までっ……」
背筋を反らしながら、環は甘い声をあげる。
そんな彼女を上から見ると、柔らかなおっぱいが床に押しつぶされて、その端がはみ出ているのが確認できる。
きゅっと引き締まったウエストからは豊かに張った臀部が突き出されている。
そして、そのたっぷりとしたヒップの下の秘唇に、貴明自身が突き刺さっている様子が余すところなく確認できる。
たちまち、貴明は本能のおもむくまま、腰を何度も打ち付けて環を存分に攻めたいという強烈な衝動に駆られた。
一度腰を大きく引くと、貴明は彼女の腰に手を当てて、思いっきり奥を穿った。
「っきゃぁぁあっ！　あぁぁあん……んあぁあ……」
突然の攻撃に環は悲鳴を上げた。
貴明は怯まずに、何度も何度も腰を振りたてては環を激しく犯しはじめた。
「んっ、はっ、はぁ、あぁぁあ……すごすぎ……んぁあぁあっ！」
ぱんぱんと小気味良い音と結合部分が激しく擦れ合う水音とが響き渡る。
自分が自分でなくなってしまうような、強烈な快感に環は身をゆだねる。
貴明のピストン運動はどんどん激しくなり、環の意識は何度も飛びそうになる。
「ん、あぁあ、あぁ、はぁあ……もっと、もっとぉ……めちゃくちゃにぃ、タカ坊ぉ……お願いぃ……」
激しい愉悦の最中、環の口から淫らなセリフが紡ぎ出される。
環が乱れれば乱れるほど、貴明の動きは獣じみてくる。体が激しく揺さぶられ、そのたびに環は高い喘ぎ声で哭く。
二人はただひたすらに互いの熱い思いに身をゆだね、情熱的に交わっていた。
「んっ、も、もぉぉお、ああっ、あぁぁ、壊れちゃうぅっ！」
じきに環が大きく震えると、ひと際高い声を上げた。
「タマ姉ぇ、はぁ、はぁ、壊れて、いいよっ！」
同時に貴明は渾身の力をこめて、環の腰を思いっきり強く引き寄せると、自らを彼女の子宮の奥深くに激しく叩き込んだ。
熱い衝動が貴明の下半身を襲い、彼女の体内でどくんと肉竿が勢い良く跳ねた。
「タカ坊ぉ……、んっ、んぁぁぁぁぁぁ……！」
二人の結合部から、愛液と精液とが混ざり合った乳白色の液体が溢れ出た。
「も、もう……ほんとに……だめなんだからぁ……」
ぽつぽつと言葉を区切りながら、かすれた声でそう言うと、環は床に躰をつっぷした。
「タマ姉？」
ぴくりとも動かなくなった環を心配そうに見下ろす。
環の膣から自らを引き抜くと、環を仰向けにした。
やはり、くたっとしたまま動かない。
だが、胸はかすかに上下しているのに気付き、貴明はほっと胸をなでおろす。
どうやら、あまりにも激しい性交のせいで気を失ってしまったようだ。
じきにすうすうという寝息が環の唇から聞こえてくる。
少し休憩をしてから、環の体をタオルで拭き、そして部屋のベッドまで運ぶ、冷えないように布団を被せると、安心してその横に腰を下ろす。
性交の疲れが出たのか、そのまま顔をうずめて眠ってしまった。

キーンコーンカーンコーン
結局、三人ともは寝ていて、試験勉強はろくに出来なかったので、結果は（環以外は）散々だった。

注: ゼロ・ディバイドのイオ
うちわネタのため意味もオチありません。

奥付

発行　リーフパーティー
発行日　2006/12/31
発行人　くろうさぎ

ホームページアドレス
http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/

リーフパーティーの本